

エルサルバドルの先住民言語 ナワト語の復興活動



たちあがる言語・ナワト語 エルサルバドルにおける 言語復興運動



疑問

- 先住民とはどんな人？
- どこに住んでいる？
- どんな言語を話す？
- どんな暮らしをしている？

考えていききたいこと

- 先住民の視点から見たエルサルバドルの歴史
- ナワト語の復興活動の意味
- 先住民の再評価と多様なアイデンティティーの存在

CENTRO AMERICA



MAPA DE EL SALVADOR



DATOS GENERALES SOBRE EL SALVADOR

国名	エルサルバドル共和国
面積	2万1040平方キロメートル
首都	サン・サルバドル
総人口	574万人（2007年の国勢調査より）
宗教	カトリック、プロテスタント、その他
公用語	スペイン語
通貨	USドル（2001年より）
主な産業	繊維製品、コーヒー、エビ
政体	立憲共和制
元首	サルバドル・サンチェス・セレン大統領（左派） 2014年6月1日就任（任期5年）

人種グループ

GRUPOS ETNICOS

スペイン系と先住民族の混血	86.3%
白人・ヨーロッパ系	12.7%
先住民	0.5%
黒人	0.1%
その他	0.4%

(アジア系・中東系など)

先住民グループ GRUPOS INDIGENAS

○ ピピル	Pipiles	26.6%
○ レンカ	Lenca	15.1%
○ カカオペラ	Cacaopera	31.3%
○ その他		27.0%

El Salvador



Cacaoperas

Pipiles

Lencas

ピピル人とは？ LOS PIPELES ナワト語とは？ EL NAHUAT

- ピピル族はメキシコから南に移住
- ナワト語はピピル族の言葉
- メキシコのナワトル語の方言
- 「ナワト語」 VS 「ピピル語」

マヤ文明の遺跡

RUINAS MAYAS

タスマル遺跡
TAZUMAL



サン・アンドレス遺跡
SAN ANDRES

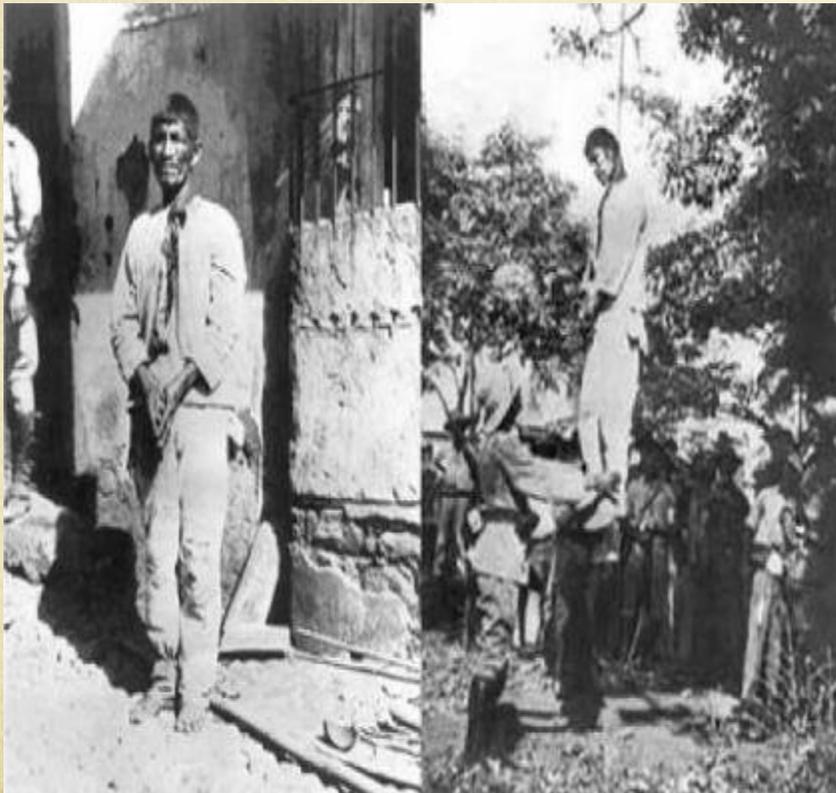


歴史概要

DATOS HISTORICOS

- 1860年 コーヒーの生産と輸出が著しく増加
- 1881年 先住民共有地が廃止
- 1931年 エルナンデス・マルティネス大統領による独裁体制・軍事政権
- 1932年 先住民の大虐殺
- 1944年 エルナンデス・マルティネス政権が崩壊
その後も軍部が政権を握って不安定な時代が続く
- 1980年 オスカル・ロメロ大司教が暗殺
エルサルバドル内戦が始まる
- 1992年 平和協定が結ばれる

1932年・先住民の大虐殺 LA MASACRE INDIGENA



歴史背景：独立後の国家作り

CONSTRUCCION DE LA REPUBLICA



政治背景：軍事政権

エルサンデス・マルティネス大統領

1931年～1944年の独裁体制

GENERAL MAXIMILIANO HERNANDEZ MARTINEZ



社会主義・共産主義の浸透

FARABUNDO MARTI



MOVIMIENTO COMUNISTA



経済背景：共有地の廃止
コーヒー輸出の増加
コーヒー共和国 LA REPUBLICA CAFETALERA

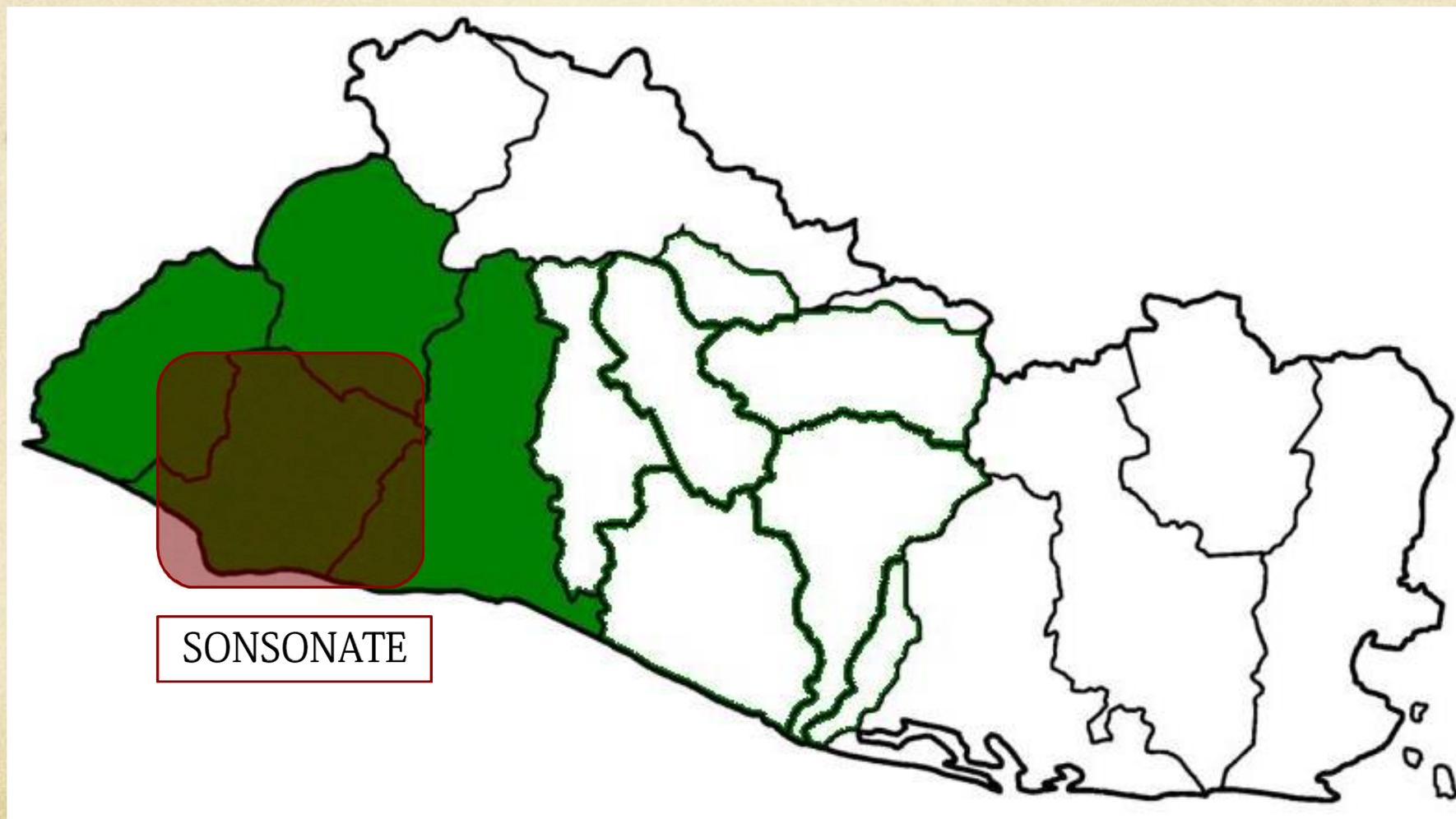


社会的背景：貧困・差別・排除

SITUACION DE LOS INDIGENAS



MASACRE INDIGENA DE 1932



CIUDAD DE IZALCO, SONSONATE



大虐殺で犠牲になった人々へのメモリアル MONUMENTO A LA MEMORIA DE LAS VICTIMAS



エルサルバドルの先住民、今の姿 LOS INDIGENAS EN LA ACTUALIDAD



ナワト語の現状

SITUACION ACTUAL DEL NAHUAT

- 母語話者が約 3 0 0 人
- 話者の高い年齢
- ナワト語を公の場で話す恐怖
- 子供にナワト語を教えることに対する拒否

先住民運動の展開

DESARROLLO DEL MOVIMIENTO INDIGENA



学校における先住民言語の教育 ENSEÑANZA DEL NAHUAT



先住民運動を可能にした出来事

- 内戦終戦と和平合意
- 2009年の大統領選挙と左派政権の誕生
- 先住民の権利を訴える国際的な取り組み
- インクルージョン政策



先住民文化と言語の復興 なぜ必要なのか？

OBJETIVOS DEL RESCATE DE LA LENGUA NAHUAT

- 先住民の視点から：
- 失われたアイデンティティを取り戻すために
- 先住民としての誇りを取り戻すために
- 先住民文化・歴史を再評価するために
- 先住民としての権利を主張するために

先住民文化と言語の復興 なぜ必要なのか？

OBJETIVOS DEL RESCATE DE LA LENGUA NAHUAT

- 国家・政府の視点から：
- エルサルバドル人のアイデンティティを再構成するため
- エルサルバドルらしさ、国民性をアピールするために
- 人権や先住民の権利に関する条約・国際的な評価を得るため
- 観光資源として
- 政治的な支持を得るため

先住民言語の復興・様々な困難

DESAFIOS EN EL RESCATE DEL NAHUAT EN EL SALVADOR

- 言語の深刻な衰退状況
- 母語話者の少なさ（約300人）
- 人々の無関心・ナワト語教育への反対
- 先住民言語の保護 VS 発展

ナワト語の復興活動の評価

RESULTADOS DEL MOVIMIENTO DE RESCATE DEL NAHUAT

- 言語学者・教育関係者・研究者の協力
- 教科書・辞書・文法書の作成
- 新しい話者
- 中央政府の関心・アプローチ
- 先住民文化の再評価
- 歴史の反省・先住民の存在を認める社会へ

たちあがる言語・ナワト語 エルサルバドルにおける 言語復興運動



PADIUSH!



ピピル族の優しい少女ルフィナの前に現れる寂しがり屋で愛らしい存在である。シピテイオに心を開いたルフィナは、一度も見たことのない海の波を贈り物にねだり、シピテイオはじつに心温まる方法——詳しくは絵本を読んでのお楽しみ——でそれをルフィナに届けてくれるのだった。この物語に描かれているように、先住民が伝統的な生活や文化を大切にしながら穏やかに暮らせるようになってはじめて、死してさまよえる先住民の魂たちが苦痛から解放されるような気がしてならない。その日は必ずやってくるはずだ。

(小澤卓也)

*参考文献

- Almeida, Paul, *Waves of Protest: Popular Struggle in El Salvador, 1925-2005*, University of Minnesota Press, 2008.
Argueta, Jorge (text), y Gloria Calderón (illustraciones), *El Zipitio*, Groundwood Books, 2003.
Carmack, Robert (editor), *Historia General de Centroamérica*, tomo. 1, Sociedad Estatal Quinto Centenario y FLACSO, 1993.
Gould, Jeffrey and Aldo Lauria-Santiago, *To Rise in Darkness: Revolution, Repression, and Memory in El Salvador, 1920-1932*, Duke University Press, 2008.

45

ピピル語

★最南端のナウア系言語★

エルサルバドルでは、ナウア系言語の最南端に位置するピピル(ナウアーピピル)語が、今もソンソナテ県のイサルコ、ナウイサルコ、クイスナワット、サント・ドミンゴ・デ・グスマンなどの集落で、少数の話者らによって保持されている。ピピル(pipil)という名称は、ナウア語で貴族を意味する“pilih”に由来するとされ、広義には、アメリカ合衆国のユタ州から中米にかけて分布するユト・アステカ語族に属し、メキシコ中央高原のナウアトル語などと同族の言語である。中米では、ニカラグアやグアテマラにも、ピピル語が存在していたが、残念ながら20世紀初頭には消滅してしまった。

ナウア系言語は、メシィカ(アステカ)王国の第8代王アウイソトルの時代(1486~1503年)には、広域商人の活動や領土拡大によって、多言語社会のメソアメリカ各地で通商語(リンガ・フランカ)として機能していた。現在の中米地域は、メシィカ王国の直接支配は受けなかったが、考古学や民族歴史学の研究によると、ピピル語を話していたエルサルバドルのクスカトラン王国や、同系語のニカラオ語を話していたニカラグアのニカラオ王国は、メシィカ勢力の南下以前にすでに成立し



ソソナテ県ナウイサルコ村の中心地の露天市（1995年8月）

ていたと指摘される。

1524年、ペドロ・デ・アルバラード率いるスペイン軍が、現在のサンサルバドル市近くにあったピピルの都、クスカトラン王国に到着したが、先住民らの抗戦により征服は難航し、彼の弟ホルヘ・デ・アルバラードによって現在のサンサルバドル市が創設されたのは、その2年後のことであった。なお、グアテマラ初代司教を務めたマロキン神父による報告書（マロキン報告書）によれば、征服時の同王国には、「1万2000軒の先住民の家屋があり、この王国の支配下には59の集落があった」という。当時の人口については諸説あるものの、都市の規模としては、グアテマラ総監領のなかでは、シウダ・レアル市（現チアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサス市）、グアテマラ市（現アンティグア・グアテマラ市）に次ぐ規模であったという。その後、先住民人口は、他の地域同様、疫病、債務労働、奴隷輸出などにより著しく減少する。また、火山国エルサ

ルバドルでは、度重なる地震も特記すべき人口減の要因である。『16世紀地理報告書』には、1557年、サンサルバドルを襲った大地震によって、先住民の家屋はすべて倒壊したと記されている。

一方、ナウア系言語は、征服以前から通商語として広く通用していたため、植民地時代にはスペイン人と先住民の仲介言語としての役割を果たした。フェリペ2世も、1570年に先住民への布教活動におけるナウア語の使用を承認し、植民地時代末期まで、各地でアルファベット表記でナウア系言語の文書が作成された。エルサルバドルでも、サンタアナ市に17、18世紀にピピル語で記された先住民コフラディア（信徒集団）の管理運営に関する文書が残されている。当時はメキシコのナウアトル語が標準語とされ、その名詞接尾辞などに特徴的な「**三**」音がなく、しばしば「訛ったメシーカ語（ナウアトル語）」と呼ばれていた。このサンタアナの古典ピピル語もナウアトル語の「**三**」音はすべて

「**三**」音に変わっており、これは現代ピピル語にも共通するものである。
ナウア系言語の方言特徴は、現在でも各地の地名に数多く残っており、場所を表す、-oo、-pa(三)、-tanや-tenango（tenamit「城壁」+go(oo)「場所」）、-tepeque（tepet「山」+que(oo)「場所」）などの接尾辞を持つのでわかりやすい。そのなかでも、とくにピピル語の方言特徴を示すのが、-tanや-tepequeであろう。メキシコでは、これらの接尾辞はそれぞれ、-tan、-tepecとなる。たとえば、現在も地名として残り、また、大手銀行の名前にもなっているクスカトラン（Cuscatlan）は、実は征服軍も同行したトラスカラ人やアステカ人らのナウアトル語による呼び方であり、現地では、グアテマラの先住民文書『ソロラの覚書（マヤ・カクチケル年代記）』に記されているとおり、クスカタンCuscatlan（cuscat「宝石」+tan）と呼ばれていた。また、山のある場所を表す接尾辞-tepequeを持つ地名としては、

表45-1 出身民族別人口

民族	人口比 (%)	人口 (人)
白人	12.7	730,233
メステイソ	86.3	4,962,132
先住民	0.2	11,500
黒人	0.1	5,750
その他	0.6	34,499
合計	99.9	5,744,114

表45-2 先住民グループ別人口

先住民	人口比 (%)	人口 (人)
ナウアーピピル	26.6	3,059
レンカ	15.1	1,737
カカウイラ	31.3	3,600
その他	27.0	3,105
合計	100.0	11,501

出典：2007年国勢調査 (<http://www.censos.gob.sv>) より作成

コアテペケ Coatepeque (coat「蛇」+tepeque)、コフテペケ Cojutepeque (coj「ユ」+「コヨーテ」+tepeque)、オコテペケ Ocotepeque (ocot「松」+tepeque)、センステンテペケ Sensuntepeque (centzon「400、多数」+tepeque) などがある。

2007年に行われた国勢調査では、エルサルバドル史上はじめて各人が認識する帰属民族名を問う項目が設けられた。それは言語運用能力を問うものではなかったが、表45-1に示すとおり先住民人口は総人口のわずか0.2%であった。なお、今回の調査で、ピピルはナウアーピピルと改めて呼ばれることとなった。また、レンカは東部のウスルタン、サンミゲル、モラサン、ラ・ウニオンなどの県に、なおカカウイラは、モラサン県のカカオペラ市など

に居住している人びとである。言語学者のキャンベルの分類によれば、この2つの言語はメソアメリカのホンジュラス西部から南西部にかけても分布し、カカウイラは、すでに消滅してしまったニカラグアのマタガルバ語と同じミスマルパン語族に分類される。この他、植民地時代の文献をひもとけば、

マヤ・ポコマン、マヤ・アチ、マンゲなどの民族・言語名も散見される。

中米地峡は古くから、まさに南北アメリカ大陸の十字路で、今もエルサルバドルで、メソアメリカ圏最南端の言語と南米最北端の言語が生き続けている。しかしながら、長く厳しい内戦時代を経て、また今日のグローバル化の波により、話者の高齢化が進み、残念ながら消滅の危機に瀕した状態にある。かつての先住民言語の機能はスペイン語に移行されても、先スペイン期から多様な文化を受容し、また影響を与えてきた民族性は、今も人びとの生活のなかに受け継がれている。現在、これらの言語・文化を保持する人びとと、言語学、民族学、社会学などの研究者や大学、行政機関などによって、言語とその民族文化の調査、記録、保存に向けての取り組みが行われており、今後の成果が期待されている。

(敦賀公子)